

キャンパスの多文化共生促進における SNS 活動の役割と効果

——遠隔コミュニケーションの取り組みを振り返って——

カースティ 祖父江

要 旨

日本の大学に在籍する学部留学生が年々増えている中、キャンパス内の「グローバル化」や「多文化共生」へのハードルの高さが指摘され続けてきた。それに加えて、2020年度に起きたコロナウィルスの感染拡大とその影響による留学生の生活に生じた諸課題、また大学の授業の遠隔化の結果、日本人学生と留学生の間の隔たりがさらに大きくなったように思われる。本稿では、日本福祉大学国際福祉開発学部の SNS や遠隔でのコミュニケーションの取り組みを紹介し、対面接触が少ない時代にこそ、この取り組みが多文化共生を促進する効果について考察する。

キーワード：遠隔授業、SNS、留学生、多文化共生、きっかけ作り

1. はじめに

独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）によると2020年現在日本の大学の学部にも所属する留学生が過去最多の人数に達している。一方、多くの大学では日本人学生と留学生の間の接触や交流が困難だと指摘されている（永井ら2014、根本ら2013、山本2019、山下2019）。本学の国際福祉開発学部では日本人学生等¹・留学生と一緒に学ぶ環境におき、学生間の交流のきっかけ作りに取り組んでいる。2019年度末に実施した学部生を対象とした調査結果から（1）授業中のグループワークと（2）留学生にリーダーシップを与える（「支援される」ことより「支援する」側に立たせる）活動が学部内の多文化共生の促進に有効であることが明らかになった（祖父江2020）。

しかし、コロナウィルス感染拡大の状態において授業が対面から遠隔に切り替わり、学生同士が顔を合わせて交流できる場面が著しく減少したことによって、2020年度の大半を本学部の学生は互いの姿が見えにくい環境に置かれていた。さらに、勝間（2020）が指摘するように、保健医療を含む行政サービスへのアクセスの困難や急増していた外国人恐怖症（xenophobia）、また、住居におけるインターネット環境の格差から生まれるデジタル・ディバイドやバイト先の営業時

間短縮あるいは休業への要請などによる急な収入の落ち込みなどから、留学生を取り巻く事情が著しく厳しくなった。本稿を執筆している時点ではまだ全体像が見えていない²が、上記のことから、遠隔授業が中心となった期間中は留学生と日本人学生等との「距離」が広がったことが予想できる。

これを受けて、2020年度には学部のゼミ活動の一環として、学生が作成した留学生とのインタビュー記事や写真をSNSなどで発信することによって留学生の存在を「見える化」し、学部生同士の距離を縮め、学部内の多文化共生を維持することを目指す取り組みを始めた。本稿では、その効果を図るために実施した2つの調査の結果を紹介し、考察する。

2. コロナ禍で留学生の存在を「見える化」という課題

コロナウィルスの感染拡大防止のため、2020年度の本学の授業のほとんどが遠隔となった。オンライン授業の準備期間中であった2020年4月に学部生202名に対してインターネット環境や遠隔授業の受け方について尋ねたところ、98.1%の日本人学生など(n=160)がパソコンを持っており、99.4%が家で無制限のWi-FiあるいはポータブルWi-Fiがあると答えたのに対し、留学生(n=42)のパソコンの所有率、家でのWi-Fiの設置率はそれぞれ61.2%、81.6%であった。さらに、留学生の多くは複数人と同じ部屋で生活しているため、オンライン授業を受けている間は同じ部屋で別の大学や専門学校の授業を受けていたり、生活したりしている人がおり、接続状況が不安定などの理由で、カメラやマイクをオンにして授業に参加することが難しい場合が多いことが分かった。こうした留学生を取り巻く環境の厳しさを考えると、留学生の存在が学部内で薄くなることが懸念される中、筆者が担当する(日本人学生と留学生から構成される)ゼミの学生が以下のようなSNS発信活動に取り組むことにした。

2.1 インスタグラムの@ryugakusei_projectについて

筆者が担当する3年ゼミ(ゼミ生14名、内留学生3名)が「多文化共生社会をどう生きる」というテーマに基づいて活動を展開している。2020年4月に、やむを得ず遠隔となった学部教育において留学生の声が届きにくくなっていることを受けて、@ryugakusei_projectというインスタグラムアカウントからの発信を企画し始めた。発信の仕方として、@ryugakusei_projectの各投稿には一人の留学生あるいは外国にルーツを持つ学生の写真と、その学生が日本に来る前の生活、来日したきっかけ、日本での生活についてのエピソードなどを1000文字程度で纏められたインタビュー記事が含まれている。文書はゼミ生が留学生にインタビューをすることによって作成され、写真は学生が撮ったり、留学生が提供したりすることによって入手している。投稿の内容は基本的に学生に任せられているが、企画の趣旨は「留学生支援」ではなく、「お金のためにしか日本に来ていない」などの風評被害や「留学生がかわいそう」という若干「上から目線」の見方に対抗し、「普通に頑張っている」留学生の日常や彼らの視点の「見える化」である。

@ryugakusei_project の初めての投稿は3カ月の準備期間を経て2020年7月に実施され、2021年3月末にはベトナム、ネパール、中国、インドネシア、フィリピン、ウズベキスタン、

スリランカを出身国とする33人の留学生の個人的なストーリーがおおよそ週1回ペースで投稿されてきた(投稿のサンプルとして、フィリピン・日本の二重国籍の学生のインタビューを図1として掲載する)。アカウントのフォロワーが330人となり、投稿の「いいね」の数が毎回の投稿で40~50程度である。大学内での広がりには限界があると考えため、2021年からは他の大学の留学生への取材や、今まで投稿された写真やテキストをポスターにし、公の場での展示などの企画を図った。2021年2月以来、@ryugakusei_project のポスター展が名古屋市中区役所、愛知県生涯学習推進センターや愛知県青少年の家で開催されてきた。



● は日本語ゼロの状態で12歳のときに日本にきました。彼の努力について、是非読んでください☆

私は日本とフィリピンのハーフです。父は日本人で母はフィリピン人です。

私は日本で生まれたが、お父さんがフィリピンで楽な生活をしたと言ひ、2歳の時にフィリピンで暮らし始めました。お母さんはフィリピンで色々なビジネスを始めました。

フィリピンに行った時の自分は日本語しか話せなかったため、1年間タガログ語を勉強してから幼稚園に入園しました。お父さんは日本語のみだったのでお母さんが通訳していました。それから10年が経ち、お母さんのビジネスが成功せず、12歳(小5)の時に帰国することになりました。戻る前の年に日本に旅行に行き住みたいと思っていたので嬉しかったです。

2013年の4月に日本に帰国した時は、タガログ語と英語しか話せなかった。それも、英語は少ししか話せなかった。帰国後の2週間で地元の小学校に入ると思っていたが、自分がフィリピンで1年学校に入るのが遅れたため、小6をどばし中学校に入りました。クラスメートは全員日本人で、日本語が全くわからなかったのが不安でしたが、英語が話せる子がいて毎回助けてくれました。最初は同じ授業受けているのに1人でひらがなとカタカナを勉強していました。それを覚えた時は普通に授業を受けていましたが、先生に当てられも質問の意味が分からなくて答えられなかった。隣が優しい人だったら教えてくれる時もあった。しかし、他の授業ではランダムで当てられ読めないのに読まれる時もありました。先生が隣に来て教えてくれる時もありました。当時は日本語教室にも週2回通っていました。中学3年間で恥ずかしい思いばかりしていたが、休みゼロで卒業しました。

高校は外国人特別入試で商業高校に入学しました。高校生になった時は少し日本語が話せるようになり楽しくなりました。勉強はまだ難しかったので日本語教室に通っていました。中学3年間のテストでは学年の最下位だったが、高校2年生の時に日本語力が上がり、クラスの10位以内に入ることができました。そして、高校3年生の時初めて会った人と話しても日本語が母語ではないと気づかれないこともあり、自分の日本語力がまた上達したことに気づかされました。高校卒業後は就職しなくなかったので、日本福祉大学に入学しました。

特に将来の夢はないが、日本語と英語を使う仕事に就きたいと思っています。卒業までには日本語能力試験1級、Toic満点と英検1級を取得したいです。語学検定だけでなく他のスキルも身に付けたいです。これからも大学生活を楽しみながら頑張っていきたいです。

● #フィリピン#日本 #🇯🇵#🇵🇭

#留学生 #学生 #頑張っている #夢がある #多文化共生 #外国人 #これからの日本 #ハーフ #外国ルーツ #日本語 #日本福祉大学 #英語 #jpt #toic #sdg4 #sdgs #internationalstudents #japan #learningjapanese #lifeinjapan #dreamers #multiculturalism #multiculturalsociety #stories #fuw #iwd

3. 調査について

@ryugakusei_project は「いいね」の数やコメントから、インスタグラムの中で高評価を得ていることが窺える。図1の投稿に対して、「いいね」が56回押され、「素晴らしすぎる!」、「すごい頑張ってきたんだね、大学で出会えてよかった、これからも応援しています!」などのコメントが寄せられた。これだけでも一定の効果が感じられるが、コロナ禍によって大学に通えない学部生がこの取り組みを通じて留学生に対する意識が変わったかどうかを明確にするために、筆者は以下の2つの調査を実施することにした。

3.1 調査対象

2020年10月下旬に、上記の活動について本学部の学生、教員、職員そして学部外の閲覧者数名を対象にアンケート調査(以下、「調査A」)を実施し、95名の回答を得た。回答者の65名は「日本人学生、あるいは家族滞在など、留学生ではない在留資格を持つ

図1 @ryugakusei_project の投稿

ている学生」(いわゆる「日本人学生等」)であった。23名は留学生, 2名は大学教員, 1名が大学職員, 4名が大学部外者であった。

さらに, 2020年12月に, 祖父江(2020)が報告した「多文化意識」に関するアンケート(以下「調査B」)を学部の1, 2, 3年生に対して再び実施した。1年前に実施したこの調査では学部の授業におけるグループワークや, 留学生へのリーダーシップが「友情を導き出す, コミュニティの絆」³を形成するきっかけとなったことが明確になったが, オンラインの学習環境において, 特に日本人学生等と留学生が1年生として経験した付き合いの程度には変化があったかということに着目し, 遠隔授業が続いた1年間において学部の多文化共生がどんな影響を受けたかについて調べた。調査Bは日本人等102人, 留学生29人の合計131人から回答を得た。

3.2 調査内容

調査A, BはどちらもGoogle Formsを用いた。調査Aにおいてインスタグラム@ryugakusei_projectについて知っているかどうか, 読んだり見たりした時の感想, 良いと思うインタビュー, そして留学生に対する意識の変化などについて尋ねた。また, 学生のみを対象に, 留学生には日本人学生等と, 日本人学生等には留学生と, もっと仲良くなりたいと思うかどうかについて尋ねた。

調査Bにおいて, 3年生までの学生に1年生当時の(留学生には日本人学生等と, 日本人学生等には留学生と)の付き合いの程度を尋ねた上で, お互いに接触することによって考え方の変化を聞いた。問いの内容は重複しているところもあったが, 調査Bでは学年別に1年生としての経験を調べることを目標としたため, コロナウィルス感染拡大の影響による時系列的な変化がみられると考え実施することにした。

4. 調査結果と考察

調査A, Bの結果とそれに対する考察をそれぞれ以下にまとめて述べる。

4.1 インスタグラム「@ryugakusei_project」の効果について(調査A)

調査Aの回答者95名のうち, 74名(77.9%)がインスタグラムのユーザーであった。30名(31.6%)が@ryugakusei_projectの活動について(調査の前に)「知っていたし, フォローをしている」と答え, 17名(17.9%)は「知っていたが, フォローしていなかった」と答えた。42名(44.2%)が調査されるまで活動について「知らなかった」, 5名(5.2%)は「インスタグラムは見られない」と答えた。

調査Aに回答するために対象者にインスタの投稿(写真とインタビュー)を(場合によって再び)見てもらい, 印象に残ったものを選んでもらった。その答えを見ると印象的だった投稿には特に偏りがなく, ほぼ全ての投稿が複数名の「印象に残った」対象として挙げられた。写真が

「印象に残った」理由を尋ねたところ、「ほのぼのさせていただいた」、「笑顔がかわいい」、「フレンドリーな人に見える」、「すごくいい笑顔をしている」、「民族衣装に好感を持ちました。とても素敵だった」、「素敵な笑顔で天然で見入っちゃいます」などがあった。また、インタビューの内容が印象に残った理由を聞いたところ、「深く人生について語る能力と日本語力に圧倒されました」、「生きる難しさや楽しさをあらわしていた」、「～さんが日本で留学生として経験した気持ちに刺激を受け、理解しました。私はとても感動し、誰もが自分の問題を抱えていることを理解しました」、「留学してすごく勉強もしていて明確な目標があってすごいなって思った」、「親に迷惑をかけないように自分で学費や生活費を払っていることがすごいと思った」、「日本に来て困ることが多いはずだけどとてもポジティブにとらえていていいと思った」、「留学生の日常と留学生の愛嬌と情緒溢れる姿がインタビューから伝わってきた」のように、読んだ人の反応が全てポジティブの方向に意識が変わったことが窺える反応であった。

@ryugakusei_project を見てから、留学生には日本人学生等と、日本人学生等には留学生と もっと仲良くなりたかどうかについて尋ねたところ、日本人学生等の 67.7% が「とても仲良くなりたか」と答えた。「とても仲良くなりたか」と「ある程度仲良くなりたか」と答えた回答者を合わせると、日本人学生等の 93.9%、留学生の 79.7% が互いに前向きな思いを示したことが分かる（図 2）。

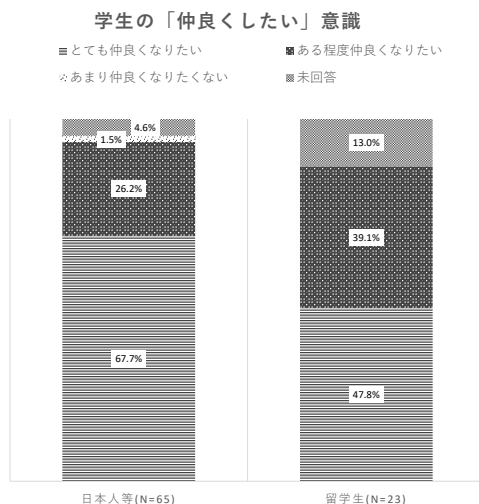


図 2 日本人学生等⇄留学生の「仲良くなりたか」意識

4.2 1 年生としての付き合いの程度（調査 B）

調査 B において、3 学年の学生に 1 年生当時の（留学生には日本人学生等と、日本人学生等には留学生と）の付き合いの程度を尋ねた。この問いへの答えを 4 つの選択（「授業中にもプライベートにも、週末や休日を含む付き合いがあった」、「授業中にもプライベートにも、授業日のみ

付き合いがあった」、「授業中のみ付き合いがあったがプライベートでの付き合いはない」、「ほぼ関わりがなかった」)から選んでもらったが、興味深いことに現在の1年生の「授業中にもプライベートにも、週末や休日を含む」付き合いの程度が日本人等・留学生問わず上の学年の「1年生当時」の経験と比較して増えていた(図3)。

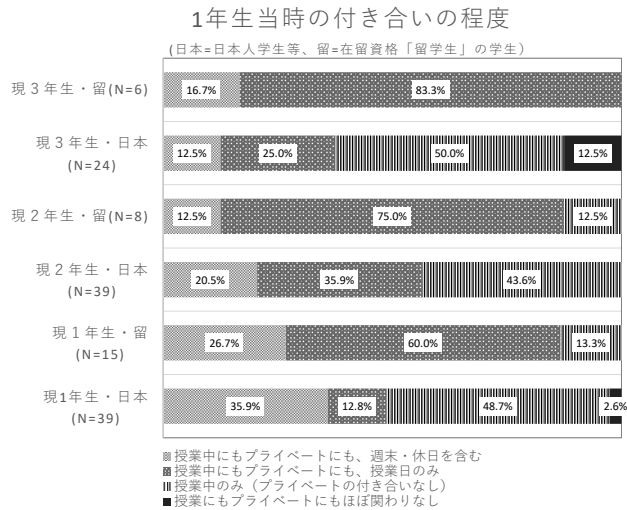


図3 日本人学生等と留学生の1年生当時の付き合いの程度

この調査が実施された時に1年生だった学生のほとんどが対面の授業を受けておらず、大学での付き合いがほとんどオンラインだったはずなのに、1,2年先輩の学生以上に週末や休日に付き合いがあったと答えたことは筆者にとって意外な結果だったが、授業が全て遠隔で展開されている環境において、直接会おうと思えばあえて週末や休日を使って意図的に待ち合わせをするしかなかったことを示す可能性はあると思われる。いずれにしても、遠隔の授業が一見して学生同士の付き合いを妨げるものと思われるのにも関わらず、学生自身が状況に負けず、接触する機会を見つけることができたのは学部の多文化共生の観点から高く評価すべきであるとも言える。調査当時の1年生に「仲良くなったきっかけ」を聞いたところ、「ブレイクアウトで一緒に分けられて、先生の指導が終わった後、話しかけて、だんだん仲良くなった」、「授業で同じグループに入ったことがきっかけで日本人学生と中よくなった」、「大学からの知らせがわからない時に教えてくれたり、色々なプログラムでグループに分けられて仲良くなった」(全て留学生, 原文ママ)、「同じ班だった」、「授業でグループで活動することになった」、「グループワーク」、「プレゼン作成」、「オンライン授業のブレイクアウトセッション」(全て日本人学生等, 原文ママ)など、オンラインであっても小グループでの活動が対面と匹敵する程度「友情を育む可能性」を育成する効果を発揮したことが窺える。

4.3 接触による留学生に対する意識の変化について

調査 A において、インスタグラムを見たり読んだりすることによって留学生に対する意識が変わったかという問いには、留学生を除く 65 名中 27 名 (41.5%) の学生が「変わった」と答えた。どのように変わったかという自由記述には、様々な回答が寄せられた。中には、「日本人としか関わったことがなかったから、あまり分からないしどのようなことを考えているかがちゃんと分からなかったけど、ちゃんと私たちと知っていることはとても似ていると思ったし、これからはどんどん留学生と仲良くしたいと思った」、「彼らと同じ大学で一緒に過ごすことの大切さを改めて考えさせられた」、「日本で暮らす中で、学ぶことがたくさんあるため、もっと外国人に優しくしなければならないと思った。日本人のイメージをいい状態で保つことにもつながると思った」、「前よりも留学生の方とのコミュニケーションをしたくなりました。投稿していただきました方はもちろん、他の方にも機会があればお会いしてみたい」、「人種や出身国は違えど、自分と同じような境遇や考え方は同じなんだと再認識させられた」、「1日1日を大切に過ごそうと思った」、「自分たちとただ文化と習慣が違うくらいで、そこまで変わらない」、「今までは留学生は考えていることがよく分かりませんでした。物事を広く考えているということを知り、真面目な印象に変わりました」(全て日本人学生等、原文ママ) という考え深い答えも寄せられた。特に、以前「違う」と思っていた留学生が実は「自分と似ている」意識は今後の学部の多文化共生にとって大切な認識だと思われ、学生が馴染みやすい SNS を通してこの発信の価値を再確認できたと考える。

また、調査 B において、遠隔授業を 1 年間受けた学生全員に (日本人学生等⇄留学生) 互いの意識の変化について尋ねたところ、1 年生日本人学生等の 46.2%、2 年生日本人学生等の 53.8%、3 年生日本人学生等の 75.0% は「変わった」と答えた (図 4)。付き合いが長ければ長いほど意識変化が生まれるのはある程度当たり前であるが、お互いの顔を直接見る機会が例年より

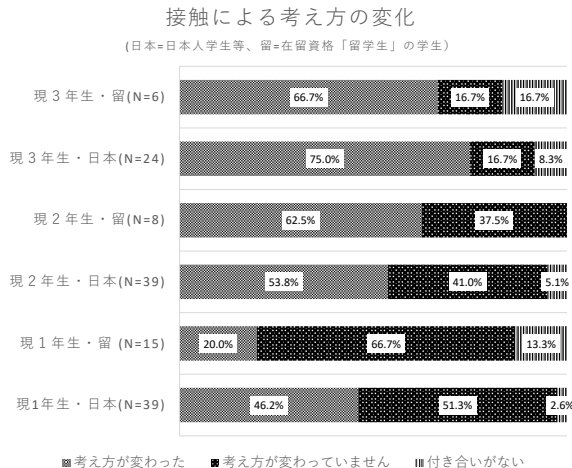


図 4 日本人学生等⇄留学生の接触による意識の変化

少なかった1年生の半数近くがどちらの調査にも意識変化を認めたのはSNSの情報発信の取り組みや遠隔授業での交流を促進する教員などの工夫の効果を裏付けると考えられる。

調査Bの「考え方が変わった」理由として、1年日本人学生等からの回答には「様々な文化について知りたいと今までより強く思えるようになった」、「留学生の方はとてもフレンドリーで自分もそうなりたいと思いました」、「多文化を受け入れられるようになった」、「日本語の難しさなど、物事の捉えるときの視野が広がった」、「いろんな考え方があると思った」（全て原文ママ）のような、留学生から「教えられた」感想が複数寄せられた。また、2～3年生の回答には「偏見がなくなった」、「文化や価値観の違いを認められるようになった」、「この学部に入るまでは、政治関係などで怖いイメージを持っていたが、いざ話してみると、とても面白く将来のためにすごく努力が要るなって思うようになった」、「外国人に対する怖さなどが一切なくなり、もっと海外のことが知りたいようになった」、「留学生への印象が変わった。自分たちと違うという風に見えるが案外近い存在であることに気付いた」（全て原文ママ）のようなものが多くあり、長期化する留学生との接触によって、依然として持っていた偏見や「当たり前」に対する思考から徐々に解放され、世間に対してより一層寛大な捉え方ができるようになっていることが窺える。

5. まとめと今後の課題

本研究はコロナ禍の状況下でのSNSを通じての留学生の「見える化」への取り組みにおいて、主に遠隔授業しか受けられなくなった学部留学生と日本人学生等が互いにどれほど意識をしたり、友情に対する意思を持ったりしているかを明らかにしようとしたものである。上記の調査の結果から見えるように、SNSの取り組みを見て日本人学生等も留学生も互いに「とても仲良くなりしたい」と思っていたことが明らかであり、この取り組みには一定の成果が上がっていることが分かった。また、授業が遠隔化されても、小グループでの学習活動（いわゆる「ブレイクアウト・セッション」など）が会話をする、ひいては仲良くなるきっかけを提供する時があることも調査の結果から見られた。一方、SNSを利用しない学生が一定数いることや、ブレイクアウト・セッションで画面オフ、マイクオフの状態で発言しない学生もたびたびいたという報告も寄せられたことから、インターネットを通じたコミュニケーションには学生の向き・不向きがあると思われる。大学生生活の（少なくとも一部の）オンライン化が長期化しそうな現在ではこのようなデジタルデバイスがさらに拡大しないための努力が必要と考えられる。

しかしながら、コロナウィルスの感染拡大から発生した様々な生活の上での変化や、遠隔授業を含む学生同士の直接の「ふれあい」を妨げると思われる措置が生じたのにも関わらず、しっかり互いを「知ろう」という一定の努力が見られたことは学生の（意外とも言える）レジリエンスを示すのではないかと思われる。コロナ禍がなかなか収束しない現状において、引き続きこうした「友情を導き出す…絆」を促進するために、SNSなどを含むICT全般を効果的に用いて、

学生間のコミュニケーションをより広く、より活発になるための工夫をすることも今後の学部の課題だと思われる。

注

- 1 本稿では「日本人学生等」とは、日本人学生あるいは「家族滞在」、「定住者」など、留学生ではない在留資格を持っている外国籍学生や、いわゆる「海外にルーツを持つ学生」のことを示す。
- 2 コロナ感染拡大の留学生への影響は新聞等に幅広く報道されている（朝日デジタル（2020（1）、2020（2））が、管見の限り発表されている「大学生へのコロナ感染拡大の影響」についての調査（藤本 2020、静岡県立大学 2020）のうち、在留資格・国籍についての設問がないため、日本人学生・留学生への影響の比較ができない。
- 3 ニューヨーク大学の Diane Ravitch 教授の「成功した多文化共生」の定義（「成功した多文化共生とは、異人種間、異民族間の友情を導き出す、コミュニティの絆を築くものである」("Successful multiculturalism builds the bonds of community that lead to interracial, interethnic friendships" <https://www.merriam-webster.com/dictionary/multiculturalism> 2020/07/01 閲覧（和訳は筆者による）

参考文献

- 朝日デジタル（2020）「愛知」収入減の留学生らを支援 東海市がバイト採用」6月22日（2021.05.08 閲覧）<https://digital.asahi.com/articles/ASN6P73JDN6FOBJB001.html>
- 朝日デジタル（2020）「暮らしていけるか…コロナ収入減、翻弄される留学生」5月18日（2021.05.08 閲覧）<https://digital.asahi.com/articles/ASN5J54FBN5HUHNB008.html>
- 勝間靖（2020）「COVID-19の大学生への影響：日本における外国人学生を中心に」*Journal of International Health* Vol.35 2:89-91
- 静岡県立大学（2020）「新型コロナウイルス感染症拡大とその対策の静岡県立大学・同短期大学部の学生に対する影響に関するアンケート回答結果について」（速報）<https://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/media/survey-results-coronavirus3.pdf>（2021.05.08 閲覧）
- 祖父江カースティ（2020）「留学生と日本人学生の接触による「他文化」に対する意識変化—国際福祉開発学部の取り組みからの一考察—」『日本福祉大学研究紀要 現代と文化』141:35-51
- 永井涼子、南浦涼介（2014）大学授業において留学生と日本人学生は共に何を学べるか—留学生教育と社会科教員養成をつなぐ試み—『大学教育』11:50-67
- 根本直弥、竹田稔史、山崎瑞紀（2013）「留学生と日本人学生の交流促進のための教育プログラムの設計」『東京都立大学横浜キャンパス情報メディアジャーナル』14:34-37
- 藤本淳也（2020）大学生への新型コロナウイルス感染症拡大の影響 報告書（完成版）<https://www.univas.jp/uploads/2020/04/6c5875a1cbd3f60e193af2fbc62dc97d.pdf>（2021.05.08 閲覧）
- 山本幹子（2019）「大学における「共修」の可能性」口頭発表資料，言語文化教育研究会研究集，タンロン大学
- 山下悠貴乃（2019）「留学生と日本人学生が互いに学びあう場の構築を目指した学習活動のデザイン」口頭発表資料，言語文化教育研究会研究集，タンロン大学